

平成23年度第7回信州大学FDショートセミナー：グループワーク①と②のまとめ

		授業・クラスサイズ	形式・狙い・焦点	実践例・うまくいく点・ポイント	問題点	コメント
A 全般的なこと	1	小規模		少人数授業の方が把握しやすい	小規模クラスの実験・実習であっても困難な場合がある 質問しなかったり休みがちな学生の場合は難しい	質問や授業参加を、早いうちに習慣づける必要性は非常に重要です。それは、授業の規模に関わらず、言い方を変えれば、学生の学びの生活の前提になるわけです。
	2		前提	理解度の把握の前に、授業の目標・その日のテーマを明示することが大事。		その日の授業で何を理解し、何を身につけるか、という点を開始時に明確にすることは非常に大切なことだと思われます。
	3		根本的な問題		とにかく、なかなか難しい。	具体的な問題点を明確にしていく必要があると思われます。
	4	大人数	根本的な問題		基本的に難しい	
	5	中・小規模	根本的な問題		実践は、個々の教員次第。	
	6		授業内	授業中に行う	講義時間の進行が読めなくなる	経験や予測によって授業の進行に余裕を持たせておく必要があります。（が、そうであっても難しいとは思いますが。）
	7		授業外	授業後に行う	大まかにはつかめるが、実際の状況が反映されているかどうか疑問	実施形態にもよると思われますが、授業のポイントと結び付いた確認方法・テーマを選択することである程度精度を高められないでしょうか？
	8		方針	わからないことをつめこむよりも、わかることを増やす		
	9		ポイントの見極め		学力(英語力)不足の問題と内容が理解できていないという問題 →混在しており分け難く、正確に把握しにくい ⇒理解が不足している点を見極める必要がある	理解不足の点をピンポイントに明らかにすることは、理解度の把握を考える上での大前提になると思われます。 授業を組み立てたり教材を選択する際に、個々のポイントを明確することで、チェック項目を設定することが可能では？
	10		学生との距離感	実験・実習の方が、「学生に近い」ので容易。	講義だと、学生との距離が「遠い」。	学生との距離感は、教員だけでなく、実は学生側にとっても重要な問題であると思います。特に大講義では、個々の学生に、いかに「講義に対する現実感覚を持たせるか」という点が問題になると思われます。 「学習事項に対する現実感覚を持たせる」ということは、全ての授業に関して言える問題点だと思います。
B 教員間	1	大人数	TA	一定の効果。	しかしTAに任せきりにはできない(フォーカスポイントのずれ)	一般的なTAセミナーに加えて、当該授業のオリエンテーション、各回の打ち合わせが必要になってくると考えられます。
	2		教員同士の情報共有	学科会議⇒出席状況をチェック		専門課程の場合は、学科・専攻全体での取り組みは非常に有効だと思われます。
	3		教員同士の情報共有	個別の学生の現状把握＋その対応⇒教員が共有して学生の指導を考える		

平成23年度第7回信州大学FDショートセミナー：グループワーク①と②のまとめ

		授業・クラスサイズ	形式・狙い・焦点	実践例・うまくいく点・ポイント	問題点	コメント
C 取 組 み 的 な	1		初年次教育全体	生活・自らの学習態度 ⇒毎週の「振り返りシート」：1週間の過ごし方&翌週の過ごし方 ⇒提出して教員がチェック：学習面でも書いてくるので、把握できる(初年次のみ)		学習に限定せずに学生生活全体の支援の中の一部という位置づけが素晴らしいです。 その分、組織としての活動をオーガナイズするのが難しくなるかもしれませんが、(どのように?)
	2	一学科の全学生	ウィークリーテスト	月曜日の1限が前の週の講義に関する試験の時間(学科全体)。 専任が担当している講義全て12クラスの内容から「5択」問題を5問ずつ出し合う＝60問。マークシート。	教員の負担が大きい	専攻課程において、学生の当該専門科目(あるいは必修科目)にしばってや行うのも一つの方法だと思います。 仮にそのように行う上での問題点は何でしょうか?
D 活 動 授 業 形 態	1		プレゼンテーション	プレゼンテーターの理解度をリスナーの理解度で把握＝リスナーが評価をする		学生間の相互評価(ピア活動)は有効な方法です。 それと教員としての評価(絶対評価)をどのように組み合わせるか、という点が問題になります。
	2	大学院	ディベート	理解、活気につながる⇒学部でも使える/必要では?		少人数のゼミのような形で、低学年から始めることも可能だと思われます。(新入生
	3		演習＋講義のセット	単位取得学生が増加 ⇒講義科目でも、演習の時間を入れる	全ての科目では無理	基礎・必修科目に限って行う方法もあると思われる。
E 観 察 や 会 話	1		学生の表情	少人数では見ることができる	大講義では難しい。	確かに難しいですが、指標になる学生数人を決めておくという手もあります。
	2			質問の際に学生をアイデンティファイすることを通して。		大人数では難しいですね。
	3	演習・ゼミ	コミュニケーション	演習・ゼミの場合は、言語的なコミュニケーションが多く、学生との関係がポイントになる。	(初対面の)1年生の方が、教員の言いたいことも言いにくい。	学生との関係づくりを行っていく上で有効な方法はないでしょうか?
	4		発言	学生同士の活動だと、「わからない」と言いやすい。	プレゼンや対教員の場合は「わからない」と発言するのが難しい。	学生が「わからない」と言える授業運営・雰囲気作り、あるいは学習態度を育成するにはどのようにしたらよいのでしょうか?
F テ ス ト な ど	1		小テスト		「何を問うのか?」、ポイントの設定が難しい。	期末試験を意識していくのがよい シラバスに沿って、各回のポイントをしっかりと押さえた出題が求められます。
	2		中間試験・小テスト		チェックに時間がかかり、教員の負担はあるが	試験の性質や出題・回答の方法にもよりますが、各ポイントでチェック項目を設定した出題方法を考えていく必要があります。
	3	～50程度	小テスト	積み重ねていくことで、到達目標を達成できるような小テストを行う		学生自身が結果をまとめておくことで、学生自身の自己把握にもつながる 小テストをポートフォリオ的に活用するのは非常に有効です。 学生にそのような習慣を身につけさせるにはどのようにしたらよいのでしょうか?
	4		小テスト	単元が終了時に小テスト、あるいは感想を書かせる		
	5		毎回5分の小テスト	間違いが多かったものは次週解説	評判は今一つ	なぜ評判が今一つなのか、気になるそうですね。 学生が、どのようなフィードバックを求めているのか、調べてみる必要がある
	6		課題チェック	読んでくる課題をチェックする際に、読んでないとわからない質問に応えさせる(課題への取り組みチェック)		予習(授業外学習)チェックでもある 出題する際に、読むためのポイントを示しておく、なお良いかもしれません。(どのように?)

平成23年度第7回信州大学FDショートセミナー：グループワーク①と②のまとめ

		授業・クラスサイズ	形式・狙い・焦点	実践例・うまくいく点・ポイント	問題点	コメント
G 筆記提出物など	1		演習課題		自分でやっているのかどうか、わからない	授業外の課題にはどうしてもつきまとう問題です。 対処法を考えるにあたって、様々な方法を検討する必要があるように思います。
	2		レポート提出 (eAlps)	⇒受講生の(個人・グループ)活動のまとめのレベルチェック	電子媒体の場合、コピーしやすいという問題点がある	
	3		レポート	授業内容を次週にレポート提出	同じ内容のレポートが提出される(コピー)	
	4		レポート課題	提出後、次週に解説		
	5		筆記提出物		その都度返却するのが難しい	小さいクラスだと、スムーズにいく
	6		筆記提出物		筆記の場合は把握しやすい →フォローしやすい	
	7	実習		作品とレポートを同時に提出 ←完全に一人で制作したのかを見極めるため	限界がある	
H 活動グループ	1		グループ活動	レポート提出	個々の理解度の把握が難しい。	みなさんどのように行っているのでしょうか？
	2		グループ活動	プレゼンテーターの理解度をリスナーの理解度で把握 ＝リスナーが評価をする	個々の理解度は把握しにくい	
	3	100	グループディスカッション	学生がどれだけ理解しているかどうかを自分で把握する →他の学生の発言を通して、自分の理解度・内容を自己把握することができる	教員が把握するのが難しい	学生自身の自己確認という点では非常に有効だと思います。が、学生がそれに気づくかどうかという点が問題ですね。（誘導する？）
I リアクションシートなど	1		リアクションペーパー	授業の最初に配布し、学生自身が自己点検・評価 →授業の最後に回収：教員が後から		学生自身の振り返りには有効だと思います。
	2		まとめシート	講義のまとめを書いて出させる	大講義の場合は、やはりチェックに手間がかかりますね。	教員からのレスポンス・フィードバックをどのようにするか、という点も問題になってきますね。
	3		レスポンスカード		全ての授業で実施すると学生の負担も大きい	
	4	大	リアクションシート	間違った理解・誤解にコメントをつけて、返却する B4の両面に7回分ずつのマスを作り、学生間で相互にコメントする。 必要に応じて教員がレス。		
	5	学部全般	点検シート	点検シート(成績)を作成させる(全ての科目？) ⇒学生自身の自己点検 ⇒チューターの教員が把握 ⇒面談		こまめで行きとどいた指導が可能になる方法だと思います。 組織ぐるみの取り組みが必要になってきますが、どのようにシステム作りを行って運営していくかという点がカギになります。

☆ 黒字は、グループワークの際に提示された内容を表しています。

☆ 青字については、その項目についての解説を記しています。

☆ 赤字は、その項目に対する問題点や、問いかけを記しています。

この「まとめ」は、第8回ショートセミナーで「学生の理解度把握」の具体的な方法を考える、あるいは現行の方法の確認や改良のヒントのきっかけになることを意図して作成してあります。

前回に挙げた問題点や実践例、指摘が全てでは決してありませんが、第7回に参加された方もされなかった方も、グループワークやディスカッションを行う上での「具体的で共通した出発点」として考えて頂ければ、と思います。

平成 23 年度第 8 回信州大学 FD ショートセミナーに向けて 第 7 回ショートセミナーの「グループワーク①と②のまとめ」について

平成 23 年度第 7 回信州大学 FD ショートセミナーでは「① 学生の理解度把握の問題点の把握と整理」, 「② 学生の理解度把握の実践例の共有」という二つのテーマでグループワークを行いました, その二つのワークの内容を一つにまとめたのが別紙の表です。まとめる際には, 各項目を大雑把に分類して, 一番左にとりあえずの見出しをつけました。

学生の理解度把握については, **方法・使用媒体** (テストや課題, 提出物, リアクションペーパー, 観察, ポートフォリオや ITC, その他) における問題の他に, **授業のクラスサイズ, 授業形態の差異, 人的な負担** (教員の負担, TA の使用), **取り組み主体** (組織として, 個々の教員として), **把握主体** (教員が把握するか, 学生自身が把握するか), そして**フィードバックの方法**といった, 様々な問題が複合的に絡み合っていることが, 今回のグループワークからも明らかになっています。もちろん今回の結果が全ての問題を網羅しているわけではありませんが, こうしたことを目に見える形にして検討するための材料にすることが, セミナーの目的でもありました。第 8 回のショートセミナーでは, この結果を踏まえて個々の問題点を検討し, 具体的な対処法を考えることが目的となってきます。

全学的に, あるいは部局単位の統一的な方法をとることが理想的ではありますが。しかしそれは非常に難しいことでしょう。その前に, 個々の教員あるいは教員グループでできることから試行実践し, 複雑に絡み合った問題をひとつひとつほぐしていくことは, 有効な方法であると思われます。教員ひとりひとりが実践している方法, そして抱えている問題点を出し合うことで, お互いにヒントになる部分もあるでしょう。また共同で検討していくことで, 新たな視点・方法が浮上してくることもあると思われます。1, 2 回のセミナーで解決策が出る問題ではありませんが, 繰り返していくことで, より有効な手段や取り組み法が出てくることが期待されます。

第 8 回 FD ショートセミナーが, 「学生の理解度把握」を行う上でのヒントや現在行っている方法の改良のためのきっかけとなるように願っています。

松岡幸司 (全学教育機構 准教授)
(高等教育研究センター兼任, FD 担当)